農村文化をどう育てていくか

地域の時代が提唱されて久しいが、依然としてヒト・モノ・カネ・情報の都市集中は衰えず、首都圏のみならず本道にあっても、札幌圏への一極集中が続いている。このことの必然として、農村の過疎化と、それに伴なう地域の不活性化を惹起させ、今日の重い課題となっている。都市型の新しい行動様式のみを「文化」と捉える風潮も危惧の念をいだかせられるところである。本号では、こうした時代背景にあっても地域の伝統や芸術など固有の文化を、骨太く中心に据えて「元気のあるムラやマチづくり」を進めている、各地の事例を紹介したい。道内では釧路管内白糠町と、十勝管内清水町および鹿追町。道外からは青森県田子町、広島県庄原市、そして宮崎県五ヶ瀬町である。それぞれが活々とひかり輝き、とても勇気づけられる報告と提言である。

暗黒の時代に文化の花は咲かないと言われるが、四世紀南北朝時代の中国では、激しい内乱と戦闘裡の片隅から、泥沼の蓮のごとき美事な南朝文化が開花した。そして永く後世への貴重な遺産となったことを、歴史は今日に伝えている。

（編集部）

農村文化の諸相とむらづくり

中国農業試験場　企画連絡室総合研究チーム
チーム長　工藤清光

今、なぜ農村文化か

今、むらづくりの中でなぜ農村　文化が問われるのだろうか。その背景を考えると、まず第一に、「物の豊かさ」から「心の豊かさ」への転換という社会の潮流がある。総理府の「国民生活に関する世論調査」によれば昭和五十年代の初めに「心の豊かさ」を重視する人が「物の豊かさ」を上回り、その後六十年代初めには「心の豊かさ」派がほぼ過半を占めるに至っている。人との触れ合いや自然を求めて農村へ足を運ぶ人が多くなり、農村もまたそれに応えてミニ共和国、オーナー制度、産直など多様な取り組みをしている。

第二は、農村においては高齢化の進行にともなって伝統の継承が危うくなってきたことである。伝統技術、伝統食あるいは伝統芸能

などを知っている人は高齢者に限られ、このままではそうした伝統が消失するという危機感から保存活動が活発になってきた。祭りも、高度経済成長期には稼ぐに忙しく廃れていったのであるが、各地で復活の兆しがある。

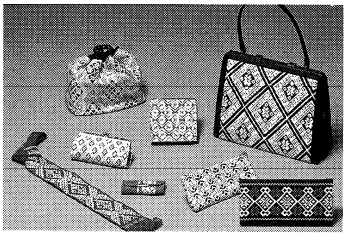
第三は、農村の生活環境整備、あるいは活性化の一環として文化施設等の建設が各地で行われていることである。小は農村高齢者創作館から大は都市に負けないような音楽ホールなど、各地で多くの施設が整備されてきている。

第四は、兼業化、混住化といった農村住民構成の異質化、あるいは高齢者層と若年層の世代間差異の拡大、中山間地域における農地荒廃、高齢化等の危機的状況の進行のなかで、文化レベルの取り組みなしには諸対策の実効が上がらなくなってきていることである。すなわち、新たな生活理念なしには農村の活性化が図れないのであって、問題の根はそれほど深く張っているのである。むらづくりにおいて文化が問われるということの基本はこの点にある。

文化とは何か

▲十和田板の沢のワラ人形まつり

ところで、文化とはわかっているようでいて、改めて何かと聞かれると返事に窮してしまう。ちなみに広辞苑をひもとくといくつかの定義が与えられている1)。①「世の中が進歩し文明になること」。②「文徳で民を教え導くこと」。③「人間が学習によって社会から習得した生活の仕方の総称。衣食住を初め技術・学問・芸術・道徳・宗教など物心両面にわたる生活形成の様式と内容を含む」。この中の③の意味がここで取り上げようとしている文化である。この定義にあるように、文化とは格別高尚なものというよりも、生活の仕方であるから本来身近なものといえよう。衣食住から宗教までは次の四つに整理できる2)。①知識＝衣食住等に関わる経験、技術、学問等。②基本的観念＝生活の基本となる観念で、宗教やイデオロギーが代表例であるが、自然観、人生観等もこれに含まれる。③社会規範＝社会生活を律する道徳や集団規範等。ここから様々な場面における行為の準則が生じる。④表現様式＝言語や芸術等。



▲こぎん工芸品

文化をこのように理解したとき、それでは農村文化とは何か。農村文化という場合の農村には二つの限定が含まれている。一つは農業と何らかの関わりを持っていることである。もう一つは、農村一般ではなくその地域固有の文化ということである。農村は農業が営まれているという点では共通しているが、その農業は個性をもった地

▲ お 山 参 詣（青森県の農村に伝わるむら祭り）

域環境の中で行われているのであり、そこでの生活もまた特徴をもっている。そういった地域特性を省みないで農村一般の文化を論じても、それは極めて皮相的である。

以上を、予備知識とした上で、次に農村文化の特徴を見てみよう。

農村文化の特徴

文化は抽象的なものではなく、具体的な様式あるいは物として存在する。むら祭りは文化の四つの要素を全て含むという点で、農村文化の代表例である。

むらの氏神の祭り（例祭）は、むら人にとって一つの大きな年中行事であり、それは五穀豊饒を願いまた感謝する農耕儀礼を兼ねている。また、初参り、七五三、厄払い等の通過儀礼の宮参りもある。このように氏神はその信仰を通してむら人の人生観、自然観を形成し、生活と密接に結びついている。なお、雨乞祈願や虫送り行事等に示されているように、かつては自然観と降雨等の経験知識とが一体となっていた。

氏神、むら祭りはまた、むらの範域を示し、むら人を氏子として組織化している。例祭の時、御輿の練り歩く範囲はむらの領域であり、虫送りの行事はむらの境界を示す。これによって外と内が区別される。この境界内のむら人が氏子であり、氏子は社を維持し、祭りを司る。氏子組織はむらの自治組織と一体となっている場合も、別になっている場合もあるが、むら社会の重要な構成要素の一つとして生活を律している。

むら祭りにおいてもう一つ見逃せないのは、氏神に奉納される神楽や獅子舞等の芸能である。

農村文化は、むら祭りに限らない。例えば、青森県には「こぎん刺し」という刺繍の技術がある。これは本来は作業衣の補強のためのものであった。しかし、その中にも美しさが追求され、独特の模

▲えんぶり（東北地方の小正月行事）

▲農家の前で踊るえんぶり組

様が発達していった。実用技術の中に表現様式としての美が含まれていたのである。

むら祭りにしても、「こぎん刺し」にしても、その中には文化の要素が複数含まれ、それらの要素は互いに不可分であった。農村文化の特徴の一つは、このように文化の複合的性格にある。

ところで、むら祭りと「こぎん刺し」と対比したとき、両者が農村生活におけるハレとケに対応していることに気づく。すなわち、日常の生活の中で蓄積していくケがれをハらし生気を回復するのが祭りである。これに対し「こぎん刺し」は日々の生活の産物である。したがって、農村文化にはいわばハレに対応する非日常の文化と、ケに対応する日常の文化がある。

ある意味では、文化の知識要素である衣食住の技術は郷土食、作業衣、農家住宅等日常の文化の性格が強い。社会規範も同様である。宴席における「無礼講」は日常の上下関係を離れるということであり、それだけ日常においては上下関係が規範として作用していることの裏返しに他ならない。一方、基本的観念や表現様式は非日常の場面で典型的に表れる。先に上げたむら祭りがそうであるし、神楽等の芸能もそうである。中には、行事食のように非日常のものもあれば、逆に方言のように日常的なものもあるが、総体的には上のように言えるだろう。

このように農村文化は、その複合的性格と相まって、日常的なものと非日常的なものが互いに関連し合っているのである。

農村文化の変化

農村文化の変化を見るとき、何よりも地域個性の喪失と普遍化が上げられる。このことの端的な例が科学技術の普及である。古老の知識は迷信として退けられ、科学技術に取って代わられた。また衣食住についても伝統的なものは古く封建的なものとして退けられ、近代的・都市的なものが導入された。表現様式についても、方言よりは標準語、民謡よりは歌謡曲というように都市と農村の差は縮まっていった。そして、こうした普遍化は兼業化等行動範囲の拡大とともに人々の行動様式や価値観にまで及んでいる。普遍化はいうまでもなく都市からの影響であり、農村文化変化の最も大きな原動力である。

一方、農村内部からの変化としては非日常性の喪失が上げられる。お年寄りの「昔と比べれば、毎日がお正月みたいにご馳走」という言葉は所得水準の向上の賜であろ

う。また、祭りの衰退はハレの喪失に他ならないが、それには兼業化あるいは農業の規模拡大や施設化によって労働から繁閑の季節性が失われていっているという背景がある。

農村文化のもう一つの変化は、上の普遍化、非日常性の喪失を受けての複合的要素から単一要素への分化である。むら祭りでいえば、経験的知識が科学技術に取って代わられ、信仰は儀礼化していった。神楽等の伝統芸能もその演じられる場はイベント等が多くなっている。「こぎん刺し」にしてももはや作業衣ではなく、ネクタイや財布等の地域特産品として残っている。

新しい文化の動き

こうした農村文化の変化に対して、新たな動きがある。

第一は、伝統の今日的な再生である。広島県庄原市の一木営農集団は朝日農業賞を受賞し全国的に知られているが、ここでは「しろみて」の行事をむらぐるみで行っている3)。営農集団が組織され、田植えもオペレーターによって機械でなされるようになって、田植え後のいわば骨休めであった「しろみて」はなくなった。しかし、それを新たな装いをとって復活させたのである。すなわち、五月の第四日曜に一枚だけ残しておいた田を手植えし、その後に盛大に演芸会および宴会を行うのである。演芸会は老人会から子供会まで出演し、出し物も踊り、演奏、唄など多彩である。この点では表現様式の要素が強いのであるが、次の意味を持っていることに留意する必要がある。①個別経営時代の手作業を思いだし、営農集団の良さを再確認する機会である。②復活当初広島市等へ他出している後継者へも案内をし、故郷への関心を呼び起こすねらいがあった。

第二は、冒頭に述べたようにミニ共和国、オーナー制度、産直等様々な形の都市との交流の動きである。緑や水等自然をテーマにしたイベントには多くの人が集まってくる。また、新鮮で安全な農産物を求める人も多い。こうした交流が農村・農業の良さを再確認するきっかけとなっている。しかし、都市が交流に求めるものと農村が求めるものの間には微妙な食違いがある。それは非日常としての農村へでかける都市側と、日常的に住んでいる農村側との差であろう。

第三は、都市の魅力にまどわされず、その一方で農村の固定観念にもとらわれない、新しい価値観に基づく活動である。広島県の北部を中心に結成されている「過疎を逆手にとる会」であるが、この会の活動の基礎にある考え方は次の十項目である4)。①過疎は「魅力ある可能性」と信じること。②「ない」ということは「何でもやれる」という可能性がある。③目標は「東京ではできないこと」をやること。④武器は「アイデア」と実践。⑤キーワードは「過密」

▲下北もちつき踊り

とのジョイント。⑥壁へのチャレンジは「実績」のつみかさね。⑦逆手にとるのは「過疎のマイナスイメージ」、廃校、廃屋、多い高齢者、失いきった活力等。⑧ほしい「つれ」は「厳しい古里だからあえて古里に生きる」という人たち。⑨とにかく、他人はどうあれ、己は過疎を相手に楽しく生きること。⑩「群れ」はそんな「楽しい生き方」を見せびらかしてつくること。

第四は、農村の都市に対する文化的なコンプレックスを解消しようとする動きである。これには文化施設の建設や国際交流が含まれる。これには、都市的文化を積極的に導入しようとする動きと、広い視野から農村・農業を見直す動きとがある。

むらづくりにおける文化戦略

さて、これまでむらづくりそのものについては触れてこなかった。最後にむらづくりの中にどのようにして文化的なものを取り入れ、また文化的なものがどのような機能を果たすかについて、若干の考察と提言をすることにしたい。

むらづくりにおいて、第一段階として一体感を高めることが必要であろう。それには共同飲食の機会をつくることが最もてっとり早い。共同飲食は、日常の対面接触が少なくなった農村において意思疎通を図る機会であり、共属感、一体感を醸成する機能がある。しかし、単に共同飲食をしようとするだけでは人は集まらない。今では気心の知れた少人数で飲む方が好まれているのである。したがって、子供やお年寄りをメインにすえ、むら人の各層を巻き込んだ装いが必要となる。そうした共同飲食を伴う活動として、むら祭りの改善、集落運動会の実施等がある。先に上げた「しろみて」もその一例である。こうした活動の企画、準備等は集落内の機能集団、任意サークル等を活用し、集落自治組織は予算措置や関係集団の調整等に専念した方が望ましい。

次の段階として、自慢をつくり自信をつけるための取り組みが考えられる。それはむらの伝統や歴史的遺跡、偉人であってもよいし、一体感醸成のための活動でもよい。そうした自信は次のむらづくり活動を生み出していく。

しかし、多くのむらにとって自慢をつくる余裕のないほど事態が切迫しているだろう。そうしたところでは危機感を高める取り組みが必要となる。むらは様々な問題を抱えているが、それは個々の農家に等しく共通しているとは限らないし、また同じように自覚されているわけでもない。したがって何らかの共通認識、それもこのままでは存亡の危機を迎えるという共通認識が必要になる。それは家の永続性を図ろうとする価値観に働きかけるしかない。しかし、それを具体的な取り組みにしようとすれば、異質化した住民間の利害調整が必要になるが、従来の家意識に基づく平等原理はその力を低下し減じている。そこには新たな調整原理が必要になるのであって、そのためには、住民構成の異質化を前提とした組織化と家意識を昇華させる新しい価値観の創出が求められるのである。

注)

1) 新村出編『広辞苑　第二版補訂版』岩波書店　昭和五十一年
2) 新睦人『現代コミュニティ論―日本文化の社会学的基礎分析』ナカニシヤ出版　一九七二年
3) 永田恵十郎『食糧・農業問題全集⑱　地域資源の国民的利用』農山漁村文化協会、一九八八年
4) 過疎を逆手にとる会『まちが輝く―逆手流まちづくり作法』第一法規出版、昭和六十二年

ブナの森の恵みにより食卓にのぼる山菜やヤマメ

ブナ帯・森の恵みの食文化

（株）やまめ里　代表取締役社長　**秋本　治**

やまめの里から

やまめの養殖の成功

やまめの里は、九州脊梁山地の北端、五ヶ瀬川の源流域にある。ここには、かつて天然のヤマメが無数に棲息していた。戦後、拡大造林政策により森林開発が進むにつれ、しだいにヤマメの数が減ってきた。そこで、減っていくヤマメを殖やそうと昭和三十八年よりヤマメ養殖の研究をはじめ、昭和三十九年秋、人工ふ化による養殖に初めて成功した。

以来、生産施設の拡張を続け、昭和四十八年には流域三箇所に延べ四千㎡の水面積を持ち、年間五百万尾のヤマメ稚魚を生産するようになった。販売先は、種苗用として河川放流や養殖事業者。食用としてホテル、旅館、割烹料理店。土産品として百貨店、土産品店などであった。

昭和五十年、生産物を地域外にのみ販売する経営に疑問を持つようになった。そこで、生産から消費までの地域ぐるみのやまめの里づくり構想を掲げ、過疎化する山村をやまめの里と呼ばれるようにしようと、『株式会社やまめの里』を設立した。

やまめの里構想は、区画漁業権設定によるヤマメの有料釣り場をベースに、ヤマメ養魚場、淡水魚生態水族館、レストランや民宿村、山菜加工場、森林公園などで、取りあえず炉端を囲む茅葺き屋根のレストラン『えのはの家』を五十年十月にオープンさせた。

昭和五十四年には、五軒の民宿が誕生し、婦人会による山菜加工場も完成した。更に、やまめの里構想は、五ヶ瀬川の分水嶺である向坂山（標高一六八四㍍）の北斜面にスキー場適地を発見し、スキー場を核とした地域づくり運動へと発展した。当初スキー場の計画は、宮崎は南国イメージが強いため関係先にスキー事業の理解を得るために気が遠くなるような時間を要した。

永い年月をかけて運動を続けたスキー場計画は、やがて自治省の

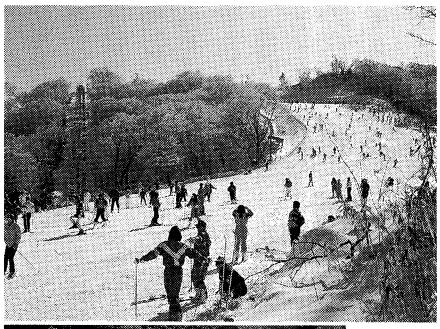
ふるさとづくり特別対策事業に採択され、町営スキー場として平成二年秋オープンした。リフト三本の小規模なスキー場ではあるが、「日本最南端」のキャッチフレーズは、南九州にスキーブームを巻き起こし、年間八万人のスキーヤーを集めるようになった。民宿村も、小さな集落に七軒の旅館、そしてホテルが一軒建って活況を呈しており、更に増加傾向にある。

こうして、むらおこしには成功したものの、開発手法の問題点や開発ビジョンについて「陰」の部分が議論されなくなった。

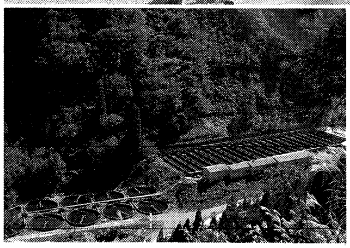
ブナ林とヤマメ

当初の自然林をそのまま活用した林間活用型スキー場構想は、必要以上のブナ林が伐採され、切り取られた土砂は湧水地帯の谷間に捨てられた。道路ののり面や河川の護岸もコンクリートだらけになってしまった。冬期には、数十トンの融雪剤が道路に散布される。これにより下流域のヤマメやホタルは全滅した。民間による開発の行き過ぎは、行政の指導に期待が寄せられる。行政による開発は、民間側からの問題提起を行政批判として受け取られるからやっかいである。長年続いたヤマメ養魚場も水質汚濁により、ついに閉鎖することになった。

スキー場開発とは別水系の養魚場も、豊富で安定していた岩清水の渓流が近年は渇水と鉄砲水に悩まされている。かって、清流が砕け散る苔むした岩場は、濁流の度に苔が削られ、しっとりとした緑の渓谷が荒々しい岩肌むき出しの砂利に埋まった谷へと荒廃してきた。ヤマメ養殖に好条件を備えた山間地帯が、森林開発により養殖事業の撤退を余儀なくされるケースは、全国的にも多い。



▲五ヶ瀬ハイランドスキー場（標高一・六一〇m）



▲'92年に閉鎖したヤマメ養殖場

ヤマメの生息する河川は、源流にブナ林を持っている。昔はヤマメが棲息していたが、今は姿を見せないといわれる河川は源流からブナ林が消えている。

現代文明は自然生態系の破壊の上に成立した。そして今、私たちは自然の猛威に苦しめられ人間性を喪失しつつある。私たちは自然への畏敬の念を持ち、森と人間との共生を謙虚に考えなければならない。このような背景から『九州ブナ文化圏構想』が生まれた。ブナ文化圏の理念を持って開発に当たれば環境破壊はなくなる筈である。今回は、このブナ文化圏から『ブナ帯・森の恵みの食文化』について想いを廻らしてみることにしたい。

縄文文化とブナ帯

囲炉裏文化とブナ林

私たちの祖先は遠い昔、木の実や山菜を煮炊きする土器を発明した。縄文時代の幕開けである。以来、人々は焚き火を囲んで鍋料理をするようになった。焚き火は、料理と共に害虫、野獣、魔物から身を守るという防御としての意味もあり、しだいに住居の中で行われるようになった。住居での焚き火は、やがて屋根裏から鍋を下げる為の自在鉤を発明し、囲炉裏となった。

囲炉裏は、全体がよく見渡せる場所を横座と呼びここに家長が座った。ヨコ座の隣が カカ座で、カカ座と向かいあった側がキャク座、入り口側がハンズジ場でここに料理の鍋や材料を置く。囲炉裏は、

料理と暖房と照明と害虫予防と家族だんらんのコミュニティ機能を合わせ持ち、住まいの中心となったのである。こう考えると、縄文時代からの囲炉裏料理は日本の食文化の原点であり、囲炉裏的発想が日本文化の土壌を作ったともいえる。

更に、囲炉裏は料理機能と暖房機能に分化した。料理機能は、囲炉裏からカマドへ、カマドからガスや電気のレンジ、オーブンなどに進化した。一方、暖房やコミュニティ機能は、囲炉裏から火鉢になり、火鉢から石炭や薪ストーブへ、ストーブからエアコンへと進化した。こうした縄文からの囲炉裏による食文化は、戦後、つい数十年前まで私たちはその一部を継承していたのである。囲炉裏を囲み、煮たり焼いたり工夫をこらして味わっていた。あかあかと燃える火を見つめながら、昔語りを語り継ぎ、情報を交換し、人生を語ったのである。

囲炉裏文化を考える時、その背景にはブナ林が浮かぶ。日本におけるブナの歴史は、晩氷期に始まる。日本の気候が最も寒冷化したのは約三万年前の氷河期で、以後晩氷期となり気候が温暖化してくると、それまで寒帯針葉樹に覆われていた森林が後退してブナ帯に変わった。一万二千年～一万三千年前である。落葉広葉樹のブナ帯では、豊富な水を湛え、ヤマメなどの陸封魚が育ち、ドングリなど多くの木の実を産するようになった。

ブナ林が縄文文化を開花

日本の人類史において、石器時代から縄文時代への幕開けは一万二千～一万三千年前といわれる。ブナ帯の拡大が縄文時代の草創期に当たるわけだ。人々はブナ林に産する豊富な木の実を採集し、アク抜き法を発明し、貯蔵方法を発明し、鍋料理のための土器を発明した。ブナ林が縄文文化を開花させたのである。

縄文中期には、現在より気温が三度近く高い時代があり、この時ブナ林は標高の高い地域と北方へ後退し、西日本では低地は照葉樹林となり、高地の山間部がブナ帯として今日に至っている。

牧畜文化のヨーロッパにおいてはブナとのかかわり合いはどうであろうか。イギリスではブナをビーチと呼び、ブック（本）の語源とされている。ドイツでもブナは「本」の語源とされ、スウェーデンやデンマークはブナと「本」が同じ言葉で表現されているといわれる。ブナ林のことをイギリスではマザー・オブ・フォレスト（森の母）、とかドクター・オブ・フォレスト（森の医者）とも呼ばれ、ドイツでは「土壌の母」と呼ばれるという。ブナ林は自然の生態系のバランスがとてもすぐれているので繁栄の象徴とされるのである。

ブナ帯料理

森の恵みのメニュー

五ヶ瀬川源流、波帰川のほとりにたたずむ茅葺きの『えのはの家』。渓流魚のヤマメを九州では「えのは」と呼んでいることからその名がついた。天井は、茅葺きの屋根裏そのままで、スス竹が黒光りしている。大きな囲炉裏は、焚き火があかあかと燃えて自在鉤の鍋が白い湯気をたてている。

ここでは、古来から伝承された料理に加えて、ブナ帯の森の恵みの料理を提供している。落葉広葉

木材としてのブナは、木質が均質で白木のなめらかな光沢は、高級家具材として貴重品である。

日本においては、戦後の拡大造林政策でブナはお金にならない木とされ、ブナ林を切り拓いた。ブナ退治という言葉も出た程である。ブナは家具材としては貴重な材料であるが、柱、梁、桁等の構造材としては不向きなので構造材需要の旺盛な戦後の復興時代は、お金にならない木とされたのである。ブナは一度伐採されると、切り株からは萌芽しない。二次林からはしだいに姿を消していき、今日では産地の奥深く、ごく一部に残っているにすぎない。

樹林に産する木の実、山野草、花、皮、根、動物類を可能な限り調理しようというわけだ。天然自然のもので毒でなければよい、漢方に使えるものはすべて料理の素材と考え、素材の組み合わせを工夫して相性のよい料理を開発する。

春を告げる山地の花にコブシがある。コブシの花は、これまで私たちは食したことがない。けれども漢方としては利用された経緯がある。そこでコブシの花の調理に取り掛かった。コブシの花を採集して、おひたしや和え物にしてみる。どうもアクが強くて食べられない。ところがお湯をとおして数日間水にさらしてアク抜きをすれば、涼しげな香りがほのかに漂い、こりこりとした歯応えがすばらしく、早春の珍味に変身する。

石楠花や朴の花も、おひたしやテンプラでいただくとなかなかオツなものである。魚や肉料理は、ヤマメ、イワナ、鹿、猪であるが、熊蜂やマムシ、イワタケ（苔の一種）などの強壮剤的なものも並ぶ。山野草の天然自然のものを古代人が食べたであろうことを想像しながら調理するのは大変愉快である。料理の完成度は、七割が素材で三割が技術といわれる。土地のものを採集し、仕入れ原価を下げれば下げるほど料理の質が高くなるという考え方である。

「えのはの家」に隣接する丸太づくりのホテルフォレストピアには、フランス料理の店『シェ・パスカル』がある。平成元年に開業、フランスの三つ星レストランのシェフを招へいして基礎を築いた。この店のコンセプトも、森の恵みのフランス料理である。フランスの代表的な素材とともに、ブナの実、岩茸、カワノリ、ヤマメ、イワナなど、ブナ林の素材を中心にしたフランス料理が特徴だ。特に、コブシの花、朴の花、クロモジ、ミズメサクラ、スカンポなど天然自然の素材からエキスを抽出し、ソースのかくし味とするところがうけている。カワノリのコンソメ、ヤマメのムースにカニソース、コブシの花のアイスクリームなどは人気メニューとなっている。

▲丸太づくりのレストラン「シェ・パスカル」

▲森の恵みのフランス料理

囲炉裏の食文化

炉端料理

九州山地に古来からあった料理の一つに竹の皮焼きがある。ヤマメのお腹を割いて、刻んだニラと味噌をまぜ合わせて詰め、これを竹の皮に包んで、囲炉裏の中に埋めて蒸焼きする方法である。

竹の皮はぬるま湯で洗って広げ、その上にニラ味噌を詰めたヤマメをのせて竹の皮で包む。包みをしばるひもは、竹の皮の端五㌢ほどを引き裂いてこれを使う。更にその上から同様にしてもう一度竹の皮で包み込む。これを囲炉裏の熱く焼けた木灰の中に埋める。木灰の熱がじんわりと竹の皮を通し、やがてニラ味噌がふつふつとたぎる。竹の皮の香りと煮えたニラ味噌がヤマメに浸潤し合って、とても旨い味噌焼きができあがる。

コツは竹の皮を二重にすることだ。蒸し上がりを見計らって木灰から取出し、土縁で軽くトントンと叩いてまつわりついた灰を落とし、外側の竹の皮を取り去れば中からほかほかのきれいな竹の皮焼きが現れる。灰の中は水分が逃げないので美味しい蒸焼きができる。これは古来から腹ぐすりといわれている調理法で、子供の頃これを食べるとお腹の調子が良くなった。

初夏には、葉の広い朴葉で包んで焼くのもよい。朴葉の香りとニラ味噌の風味が絶妙にヤマメと調和する。

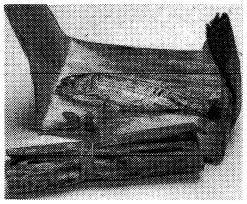
日月火水木金土による料理

◀茅葺き屋根の囲炉裏端

およそ、ものを加熱調理するには、五つの火があるといわれる。その一つは火で焼いたりあぶったりする方法だ。その二つは水の火である。水を加熱して調理する。水炊きなどの煮物が代表的な調理法だ。その三つは木の火である。草の葉や木質を透して加熱する。竹筒にお米を入れて小判を炊いたり、奉書焼きなどもその手法だろう。四つめは、金の火である。金属を温め金属の熱により加熱する。鉄板焼きがその代表だ。その五は土の火である。囲炉裏の木灰の中で焼いたり、河原の石を温めて石の熱で焼いたりする方法である。

これらを並べると火、水、木、金、土となる。これに天日による干物等の調理と、凍豆腐のように夜空の寒風に吹かせる調理を月とすれば、日月火水木金土と七曜を表わすことになる。

竹の皮焼きは、囲炉裏の木灰による〝土の火〟と竹の皮や朴葉による〝木の火〟を同時に使って加熱調理する技術で、最高の調理方法というわけだ。この調理法はおそらく古代の焚き火を囲んで食事する頃からすでに工夫されていたものであろう。日本の伝統的な囲炉裏の食文化といえる。



▲竹の皮焼き500円

囲炉裏の木灰を使った加熱調理方法は、この他にもいろいろある。ムカゴ（ヤマイモの実）に糸を通して数珠状につなぎ木灰に埋めて焼いたり、ギンナンやクルミなどの実も囲炉裏の灰の中で焼いて食べた。トウモロコシの実は、熱い灰の中に埋めておくとやがてポンとはじけて灰から飛び出し、ポップコーンができあがる。

栗の実も炉辺料理が旨い。採りたての栗は、堅い皮の一部を少し削り囲炉裏の灰の中に埋めて焼く。この時、皮を削らずに焼くとバーンと皮がはじけ火が飛び散る。お伽話のサルカニ合戦にでてくるお話である。

記憶にある山栗の味はとても美味であった。山野のいたるところに栗の木が林立し、秋には林床に真っ赤な実を落していた。谷川の深みには、流された栗の実が溜まり、赤いかたまりとなって水面にゆらいで見えた。これを網で掬いとったものだ。栗の実は、枡で計る時カラカラと音をたてる。このことから野鳥のキツツキをクリハカリと呼ぶ。キツツキが古木をつつき虫を取り出す音がカラカラと栗を計るように聞こえたからにちがいない。戦後、クリタマバチが蔓延し、栗の梢に卵を産み付けてクリタマをつくり、これが原因でブナ林から野性の栗は悉く消えてしまった。

猪鍋と塩焼

冬は猪猟だ。獲物を仕留めた猟師は村の入り口で矢立てと呼ぶ空砲を撃って村人に猟の成果を知らせる。矢立てを聞いた村人は、畑の土中深く掘って保存してある大根を掘り出し、自在鉤に大きな鍋をかけてお湯を沸す。やがて、獲物を担いだ猟師が血のりのついた猟犬を引き連れて庭先に姿を見せる。

むしろの上で獲物の解体が始まる。肝臓の一部を小さく切り取り、串に刺して山の神に供え、森の恵みに感謝する。臓物は川へ運んで腸管を裏返しにしてきれいに洗う。洗った内蔵は骨と共に鍋に入れ、あかあかと燃える囲炉裏の上でぐったぐったと炊き上げる。しばらく

して、そいだ大根を鍋に入れ、もうひとふきさせる。沸騰したところで、しょうゆと塩を加えて更にひとふきさせると猪鍋の出来上がりである。

猪鍋を肴に酒盛りが始まるが、この時、猟師は炉端の金火ばしに特別の肉塊を串刺しにし、尺塩をうって（一尺はなして塩をふりかける）囲炉裏の燃える火にかざしてジュウジュウ焼きながら食べる。この肉は猪を仕留めた経験のある者だけに与えられるもので、経験のない者が食べると以後猪を狙う時、手がふるえて狩ができなくなるといわれた。

今考えると、その特別な肉は心臓であった。猪は心臓の塩焼きが最も旨い。少ない肉を猟師仲間だけで食べようとした口実に違いないが、囲炉裏端に座るとそれは不思議と神聖な作法に思えたものである。

カッポ酒

カッポ酒とは、竹筒の一節を切り取り、上部の節に小さな穴を開けて、そこから酒を筒に注ぎ込み、竹筒を火にかざして酒の熱燗をつける方法である。酒の入った竹筒を焚き火の中に差し入れると、竹筒に火がついて外側が燃えはじめる。竹筒は中に液体が入っていれば、外側が燃えても筒の中の液体が漏れることはない。竹筒の節の上部は、竹槍のように鋭く切ってあるので、この永い切口から竹のエキスがジュルジュルと滲み出し、竹筒の中に糸をひいて落ち酒に滲み込む。もちろん竹の内部からも竹のエキスが酒に浸潤する。

▲カッポ酒、イワナのヒレ酒、活きイワナの焼酎イワナ酒

コツは沸騰少し前に取り出すタイミングである。これは超熱燗が旨い。竹のエキスが酒に馴染んで、すっきりした甘味とコクのある味わいになり、これがお酒かと思われるほど極上の一献となる。竹は一年経った真竹がよい。まだ軟らかい若竹は少し味がしつこくなる。

カッポ酒の語源は二説ある。酒を注ぐと竹筒の節に開けた小さな穴からカッポカッポと音をたてながら酒が流れ出てくるのでカッポ酒という説と、竹筒のことを九州山地では、カッポと呼ぶことからきているという説である。かつては、焼き畑など山中の作業に出かける際、竹筒に水を汲んで運んだ。この竹筒のことをヨギリと呼ぶ。水は喉の渇きをいやし、焚き火の後始末に使った。この時、付近に自生している山茶の葉を竹筒に入れ、これを火にかざして即席のお茶をたてた。こうしたことから竹筒にお酒を入れて燗するようになったといわれる。

イワナ酒は生き残った

近年、縄文時代は高い文化を持っていたことがしだいに分かってきた。縄文時代は既に酒をつくっていたともいわれる。

「そうだ、森の恵みの料理には、それにふさわしい飲み物があってこそ本当の味が味わえる」。そこで、いろいろな森の酒をつくった。二十年程前のお話である。マタタビ、グミ、イチイ、ガマズミ、サルナシなど木の実の酒、ヤマザクラ、シャクナゲ、ベニバナなど花の酒、ササの葉やヨモギなどいろんな酒を提供しはじめた。これは、非常に評判を呼んだ。評判がよいと問題も起こる。ある時、税務署から見えられた。名刺を差し出される時は良いが、手帳を見せられたらこれは良くない時である。

「あなたのところでやっている食前酒は、酒税法違反の疑いがある」というのだ。そこで反論した。「森の花や木の実を焼酎に入れて提供するのであって、これは古来からの森の食文化であり、一種の料理なのだ。びん詰めして売るわけではないし、誰にも迷惑をかけないし、お客さんは喜んで下さる。今ごろ腐った法律を持ち出してなんですか」。と開きなおったから大変である。一日中調書をとられた。そして、次回は二人で見えられ、その次は三人になった。そのたびに一日中かん詰めで、食前酒を始めた動機からどのようなものを造ったかをこと細かに調べられ

るのである。

アホらしくなって「どのようにでも処分してください」と言ったら「これまで仕入れた焼酎を、一升につき二百何拾円かの割で税金を払いますか、すると穏便に処分してあげる」といわれた。こうして始末書を書き、ことは終わった。後味の悪い結末である。この時、活き残ったのが「イワナ酒」である。

九州は焼酎の産地だ。そこで、焼酎の超熱燗に活きたイワナを入れてみた。突然熱い焼酎の中で泳がされたイワナは、もがいて暴れる。その内、身がはじけ焼酎は白濁する。これをすくって飲んでみたら、旨いのである。

乱暴なお話だが、やがてマニアルが出来上がった。先ず、焼酎をやかんに入れ超熱燗にする。熱燗の頃合は、やかんの底から気泡が一つ上がるまでとする。一方で、土鍋にお湯を張って温めておく。焼酎の超熱燗のタイミングを見ながら、直前に活きたイワナの腹をさっと開いて臓物を取り出す。土鍋はお湯を捨て熱燗の焼酎をこれに移す。イワナは乾いた布で水分をふき取る。土鍋のフタを少し開けて、そこからイワナを入れ、すぐフタをする。

直前に臓物を抜かれたイワナはまだ元気だ。イワナは暴れ、フタをはね返すので一分間だけフタを手で押さえておく。七分以上経過したらフタを開けて竹の柄杓でこれをすくって飲む。焼酎一升に対し、五〇〇㌘前後のイワナを使う。マニアルは以上である。

イワナ酒を楽しむお客様に、二とおりの受け取り方がある。一つは、残酷なことをする、というお客様。もう一方は、酒に浸って死んでいくイワナは本望でしょうよ、というお客様である。

「これは、お客様にお出しする直前に入れ合わせるので料理と認めましょう。焼酎に数週間とか数ヵ月浸して置かなければ旨味が出ないものは、リキュールになり、酒税法違反となります」ということでイワナ酒は生き残ったのである。

囲炉裏文化の伝承へ

囲炉裏のある暮らしは、お祭りなどのハレの日にペッタンペッタンとよく臼でお餅をついた。そのお餅は、数週間にわたって毎日炉端で焼いて食べる。餅を焼くコツは、肉や魚と反対で頻繁に裏返しを繰り返すことである。すると全体がふっくらとなり、一気にプーツとふくれあがって焼ける。こんがり焼けた中からアンコのアズキがのぞいて見える。アンコのないヘラ餅は一度焼けてから、更にしょうゆをかけて再びこんがりと香ばしく焼く。囲炉裏が無くなってからは、お餅はなかなか食べない。ガスや電子レンジで焼くのがおっくうなことと、囲炉裏で焼いたあの旨味がでないからである。イモやトウモロコシも同じである。旬には毎日のように囲炉裏で焼いて食べていた。今は手元にあっても焼いて食べない。電気やガスの火では、あの旨味がでないからである。

こうした囲炉裏の食文化は、加熱調理以外にも木灰を使って木の実や山菜からあく抜きする技術が発明された。燻製技術も囲炉裏の上に魚や肉を吊るすことにより発明された。囲炉裏は、日本人の食生活に大きな文化をもたらした。

農村は、囲炉裏がなくなって生活様式も近代化し、食生活も多様化したが、日本の伝統的な囲炉裏の食文化が途絶えようとしている。都市の人々は、ブナ林を知らない。樹木や野草の名前も知らないし、食べられるものと食べられないものとの判別もつかない。

そこで、日本最南端のスキー場で賑わう五ヶ瀬の民宿村では、この伝統的な囲炉裏文化を復活させて、お客をもてなそうという声が高まってきた。それぞれが庭の片隅に小さな茅葺き屋根の小屋を建て、自在鉤を吊るして囲炉裏を造り、本物のブナ林の森の恵みの炉端料理を堪能してもらおうというわけである。九州山地のブナ林で囲炉裏の食文化が復活し、本物の囲炉裏文化が後世に伝えられることになればすばらしいことである。

農村の活性化と郷土芸能

「白糠駒踊り」と白糠町のまちづくり

白糠町教育委員会　生涯学習課
社会教育係長　桜井久也

まちづくりとは、地域振興を表す。地域のあらゆる分野の活性化を図ることは、そこに住む人々の生活のすべての面が活気あるようにすることである。また、地域の活性化とは、一般的にはその地域が発展し、それにつれて人口が増加することをいう。しかし、地域活性化のねらいはそればかりではない。たとえ人口が少なくても、そこに住む住民が生き生きと創造的に暮らしていけることも大切である。ひとりひとりが、生きがいをもつとともに、それぞれに目標をもち自らの分野で活発に活動していることが活性化しているということである。

本町の酪農地帯のひとつ「和天別地区」を中心に保存・伝承されている「白糠駒踊り」は、ふるさとの芸能、郷土の芸能として町民に親しまれている。白糠に芽生え、根づいた「白糠駒踊り」。ここに文化によるまちづくりの取組みとして紹介したい。

白糠町の概要

本町は、霧の都として異国情緒を醸し出している北海道東部にあるマリンポストの町、釧路市に隣接している。

南は太平洋の海岸地帯と、北は雄大な雄阿寒岳などの阿寒国立公園を頂く千島火山帯に連なり、冬は酷寒の厳しい北国に育まれ、大自然に抱かれた緑豊かな町である。

気候は、春から夏にかけて沿岸部に海霧が発生し、多湿で冷涼となり、生活および生産活動に大きな影響を与えている。また、初秋から冬季へかけては移動性の高気圧が入り込むため、晴天が続き、乾燥した冷たい季節風が吹き、雪の少ない寒冷な冬をむかえる。降水量は六、八月に多く、全域を通して太平洋側東部気候といえる。

町の経済は、農林水産業を中心にバランスが保たれ、「釧路・白糠工業団地」による企業誘致も進められているなど、釧路圏域の工業ベルト地帯の確立を目指して調和のとれた産業のまちづくりに全力をあげている。

＊人　口　一二、九〇九名
（平成五年十一月現在）
＊世帯戸数　四、六五二戸
＊就業人口　第一次産業
二、二三七名
（農業人口およそ二三％）
＊交　通
空　港　釧路空港へ二十五分
（十九㌔）
鉄　道　ＪＲ根室本線白糠駅
港　湾　釧路西港へ四十分
（二十六㌔）

白糠町の農業

本町の農業の起源は、享保元年（一七一六年）に松前藩が白糠蝦

夷に雑穀を植え付けたことが始まりといわれている。それからほぼ八十年後の寛政十二年（一八〇〇年）にこの地で開拓の鍬を振った武蔵国八王子郷の開拓集団が実際に、粟、稗、大豆、小豆、大根、大麦などを作っていたが、農を業とするほどの成果はあげられなかったという。

明治三十年以降、本格的な農業が展開され始め、昭和に入って乳牛主体の営農が脚光をあび、戦後、完全に酪農への転換が図られた。今日、白糠の酪農は生産調整など厳しい環境にあり、生産基盤の整備や育成技術の向上、農業の集約化、バイテクなど農家経営の近代化と安定に努めている。また、後継者を確保するための交流の場づくりを積極的に取り進めるなど、地域の特性を活かした新しい農業を開拓する努力が行われている。

郷土芸能 「白糠駒踊り」の歴史

「白糠駒踊り」は、大正七年、軍馬補充部釧路支部音別派出部の開部記念祭に、青森県から派遣されてきた人々の指導を受けた同派出部に働く若い人たちによって初めて披露された。それが支部直轄の和天別分厩で働く若者たちに伝えられ、翌八年支部開庁記念祭以後、毎年上演されるようになった。しかし、太平洋戦争中は自粛中断され、戦後の昭和二十一年ごろ、当初は旧態どおり旧南部藩（岩手県）の「野馬捕り」のモチーフが、地元青年の手によって「若駒の一日の生態を活写する」モチーフにかわり創意と工夫により、踊り、囃子、衣装が一新された。ここに白糠独特の駒踊りが生まれた。昭和二十三年には全道民芸大会に出場し最優秀賞を受賞した。以後、全国、全道から記念行事などでの公演招聘が相次いだ。

近年では、昭和六十三年に東京都で開催された第十一回日本民謡大賞にテレビ出演、続く平成二年には東京都八王子市へ町の文化使節団として派遣されている。その他にも北海道駒踊りフエスティバルや生涯学習『悠・悠フエスティバルインくしろ』などに参加、今日に至っている。

▲ 白糠駒踊り、勇壮活発な若駒の様子

独特な踊り（白糠駒踊り四つの場面）

昭和二十一年ごろ、従来の踊りから「和天別地区」の青年を中心に創意、工夫され、白糠の風土に合った「若駒の一日の生態を活写」する独特な踊りに生まれ変わった。

踊りは四節からなり、若駒の成長盛りな一日の生活の様子を表していく極めて勇壮活発な構成となっている。二十名の円陣舞踊は観る者に力を与え、各節を通じて若駒の表情を伝えている。十二頭の若駒のはり形を使い、つけ舞は露払い（なぎなた、杵、太鼓、笛、鐘）に先導されて登場し、一隊を成している。

白糠駒踊り同好会と河原小中学校駒踊りクラブ

現在、「白糠駒踊り」は大人と子どもの二つの団体により保存、伝承活動がされている。

(1) 白糠駒踊り同好会

（会長　吉田恵喜・会員二十七名）

酪農関係者を中心に一般成人で構成されている。会員の年齢構成も幅広く七十代の高齢者から二十代前半の若者までまさに異世代集団である。七十代の会員は昭和二十一年、発足当時からのメンバー

であり、古くは東京オリンピック、大阪万博のセレモニーにも出演参加している。もちろん今も現役である。最近は年齢からくる体力の衰えから動きに俊敏さがみられないものの、気力ではまだまだ若い者に負けないという。

この会では四十代もまだまだ若者扱いである。仲間が集まり練習が終わった後のひとときは、各自が充実するひとときでもある。

人口の減少などによる後継者の不足や職業上の問題から、なかなか全員がそろって活動できないことが悩みではあるが、組織強化と積極的な活動への機運は高まってきている。

▲河原小中学校駒踊りクラブ

◀二頭の若駒

(2) 河原小中学校駒踊りクラブ

駒踊りが、本町において根づいている原因のひとつに学校の取組みが上げられる。「和天別地区」にある河原小中学校では、学校カリキュラムとして特別活動に駒踊りを組み入れている。また、青少年のふるさと意識を高める活動として、地域と学校が協力して駒踊りによる「ふるさと運動実行委員会」を組織、愛郷心の育成にも努めている。同校の活動がまちのイメージアップに役立っていることはまぎれもない事実である。ここにも地域と学校の連携によるまちづくりの雰囲気が作られている。学校は本来の学校教育に力点をおくことは当然であるが、その成果の一部を地域に生かす意義もまた大きいものがある。そのことによって、生徒たちの社会参加の意識や体験した成果が、まちづくり地域づくりに生かされるからである。また、学校としても地域との連携により学校の特色づくりが進められる。なによりも効果的なのは地域とのふれあいや共通理解が深められることである。

同校の駒踊りとの関わりは、昭和四十一年に中学校男子によりクラブが結成されたことにはじまる。その年の開校二十周年記念式典で発表、以後部落連合運動会や開拓神社祭典に欠かさず奉納、継承している。最近は生徒数の減少により、女生徒の駒も出てきた。男子よりたくましい駒も時折みられる。昭和五十五年からは小学生三年生以上で組織、十二頭の若駒、太鼓、横笛、鐘、クラベス、鈴と合計二十七名で構成されている。また、同校の所在地が「駒踊り発祥の地」であるところから、年次の入替えや新編成などの技術指導も、同校卒業生父兄の協力ですんなりとおこなわれている。親子で駒踊りを継承している家庭もあり、夜のひとときには共通の話題として家庭での駒踊り談義も珍しくないという。平成三年度からは「ふるさと運動」の一環として駒踊りによる市町村交流がおこなわれている。これまでたくさんの人と知り合い、町を知った。ふるさとから出てあらためて自分の町をみる。その時、自分たちが住む町の良さを少しでも感じてくれたらこの事業は成果があったと思う。反面、やがて訪れるであろう問題もある。就学人

口の減少である。近い将来、児童、生徒の減少から同校単独での構成が困難な状況が見込まれるからである。さらに全町的な連携と協力が必要になってくる。

まちぐるみの応援

軍馬補充部関係者により、移入された駒踊りは、地元青年たちの手によって白糠独特なものとなり、地域の特性を活かした郷土芸能として誕生した。町内の各種行事などへも積極的に出演参加、地域に育み、根づいたことはいうまでもない。町内では、この駒踊りを白糠の郷土芸能として物心両面から支えようと民間有志が声をかけあった。昭和三十五年に「駒踊り振興会」が、またこれを全町的な組織にひろげた「白糠駒踊り振興会」が昭和三十七年に、さらに、町民の郷土芸能への保存・伝承に対する認識と理解の中で全町全戸会員制度による「白糠町郷土芸能振興会」が昭和五十三年に発足された。ここに財政的、精神的な基盤が確立された。全町的なバックアップ体制の中で町のイメージキャラクターとしての普及推進が図られている。

これらの活動は町民の生活の中にも見られるようになった。町を紹介する冊子の一ページに駒踊りがあり、商店の包紙にも駒踊りの絵図が描かれている。町のところどころに駒踊りの看板がある。夏祭りなど各種の祭りにおいても、その一部を担う出演参加が要請される。

収穫の秋、白糠でも海の幸、山の幸を祝った産業祭りがある。この時期ふるさとへ帰ってくる人々がいる。口々に産業祭りで駒踊りが見たいという。演技者たちもそれを知ってか必ず出演する。出演の時間、会場は人でいっぱいになる。昨年は大人と子どもの混成で勇壮活発な踊りを見せてくれた。ここに、演じる者と観る者、それぞれ立場は違っても駒踊りが地域の多くの人のものとなっている。演技が終わり、そこに輪ができる。「これを見ないと白糠に帰って来た気がしない」と誰かがいった。笑顔と笑顔、語らいとふれあいが生まれ、その時駒踊りがまちづくりの一環として実を結ぶ。町民の心の中に駒踊りが根づいている一瞬である。

全道でも地域に固有に誕生したものを、今再び評価し、再生させ、その活動を軸としたまちづくりが多くなってきたといわれている。地域の住民や行政が財政的にまた精神的な面で支援する「白糠駒踊り」をまちづくりのひとつと考えたい。

まちづくりと駒踊り

こころの豊かさが求められてきている今日、駒踊りの保存、伝承は「和天別地区」の住民を中心に続けられている。町がそして地域、学校、家庭が一体となって協力してきたからこそ、今日の郷土芸能「白糠駒踊り」がある。

本町は北海道のどこでも見られるような過疎の町であり、人口の流出、高齢化、若者の減少と嫁不足、農家の後継者不足などが大きな問題となってきている。これは直接、地域の沈滞、崩壊につながる恐れがあり、重大なことである。

◀勇壮活発に躍る
学校駒踊りクラブ

地域の活性化とは、たとえ人口が少なくてもそこに住む住民が生き生きと創造的に暮らしていけることである。ひとりひとりが何らかの役割を果していけること、あるいは大切にされていると実感することである。

郷土芸能「白糠駒踊り」、「和天別地区」はもちろん、町に住む

住民の共通の話題である。全員が何らかの形で参加している。地域ぐるみの活動が活性化をもたらしているのはいうまでもない。白糠にしかない文化として、地域の誇りとして、住民の心のよりどころとしてここに「白糠駒踊り」がある。

白糠の文化活動

生活水準の向上、自由時間の増大、高齢化の進展などから、町民の文化活動への要求は多種多様化している。本町にも、ようやく心の豊さを求める動きが出てきている。

駒踊りを核とした地域の活性化は、望ましい地域環境を作ることにあり、町のイメージアップを図ることやそれらを活用して活発な住民活動の展開が期待された。

時代の変化に伴い、活動も多様化してきた。昨年、町内にひとつの文化団体ができた。これは、ある公演をきっかけに文化によるまちづくりをめざした町民有志で組織されたものである。メンバーを見ると町内のほとんどの業種の代表者が名を連ねている。地域の多くの人を巻き込んだ団体であり、文化によるまちづくりをテーマに仮称「文化会館」建設を目指すなど、活発な活動が期待されている。

また、ボランティアの「読み聞かせの会」が十周年を迎えた。自らが企画・運営する中で記念講演会が開催され、たくさんの人が参加した。

公民館講座の受講生も講座終了後、何人かが活動を続けている。あの「和天別地区」でもおかあさんたちが集まり文化活動を楽しんでいる。これらの団体が、町の発展に、それぞれの活動を通じて寄与することが、文化のまちづくりの特色だと感じている。

本町でもいろいろな形で、少しずつではあるものの文化に親しみ、楽しみながら活動に参加する住民が増えてきている。

▲白糠駒踊り同好会、露払い（なぎなた、杵、太鼓、笛、鐘）

生活の中に文化を

だれもの心の中に、豊かさと楽しいひとときを過ごしたいという気持ちがある。充実した活動への関心や要求に答えていくことが地域文化を育てるキーワードのひとつだと思う。日常の生活が文化と深く関わってこそ、人々がいきいきと生活する地域社会が生まれる。人口が多少減少しても、自分が住む町に誇りをもち、いきいきと生活する人々がいれば町はかならず活性化するといわれている。一人ひとりが、生活の理想を高めいく活動が大切であり、それは自分の力でやりとげなければならない。

一人ひとりのそうした意識が、仲間との出合いや多くの人々とのふれあいを生み、その中で、励まし合い、高め合う関係がつくられ、人々の協力と共同の中で、一層豊かなものが創り出されるという。くらしの中から生まれた活動は、必ずくらしをひらく方向をめざすこととなる。

地域に住む人々が共通の関心や要求でつながって、話し合い、当面する課題に取り組むことが、地域発展の力を生み出すことになる。

身近なところに、ほんの小さな発見をすることがある。それが感動に結びつくとき、幸せを感じる。価値感は人それぞれ違うものの感動する心は同じである。

本町でも、まだまだ足りない部分はたくさんあり、発見することは山ほどある。これからも、より良い環境への条件整備と地域住民の文化を高める方策を探っていきたい。「新たな感動をめざして」。

多様な文化活動を通じたまちづくり

二十一世紀をたくましく生きていく
”タプコプふるさと村“ ―構想の一事例―

財団法人 タプコピア
事務局長 中澤一郎

にんにく生産日本一のまち

青森県田子町（たっこまち）は、岩手県境と秋田県境に接し十和田湖の南東に位置する山間部の人口八千人ほどの町である。森林率が九割に近く、平地が少ないことを逆手に森林の恩恵を受けつつ畜産のほか葉たばこ、高原野菜等畑作および米作によるバランスのとれた生産により農林業が盛んである。特に、にんにくの生産では、中央市場において質・量ともに日本一の評価を近年得ている。

このため、日本一のにんにくの産地という自信と誇りを核として、いわゆる地域の活性化を図ってきた。その中身は、単に生産量云々、イベント騒ぎから脱却した中で、食、医などの文化的要素を背景としたシンポジウムの実施、世界一の生産地との国際交流など多角的な取り組みを行い、地道ながら住民の”やる気と自信“を喚起し、これらの事例においては、小規模ながらも元気のある町として全国的にも名高い。

総合計画 ―タプコピア―

このような中で、町では総合計画＝名付けて「タプコピア」を住民自ら策定し、それに基づき多様な取り組みを行っている。この計画は、「私たち」みんなの計画という位置付けから住民の希望・意思が込められたもので、子供から老人まで読めるような物語調の、行政が作成したものとは思えない特徴的な内容となっている。その基本構想および基本施策の核心を次に紹介する。

> 田子町が未来にめざすものは、私たちが二十一世紀をたくましく生きていく知恵と創造力を養い、実践と協調性によって、新しいふるさとを築いていくことです。新しいふるさとは、人と人、心と心のふれあう地域社会であり、すべての住民が生きるに値し、住むに値すると心から信じ、夢と希望に満ちたふるさと（ファイン・タプコピア）の創造にあります。（中略）第三次田子町総合計画の「心」は、次のようにきめました。
> (1) 人づくり
> (2) 組織づくり
> (3) 地域づくり
> この三本のテーマとがプログラムです。このプログラムによって、人びとが未来に向けてスタートし、二十一世紀へ力づよく行動をおこしてい

くのです。そのことによって、計画もまた作動していくのです。住民も行政も、行動（アクション）をおこすことによってのみ、計画が計画としての価値を生みだしていくのです。

田子町第三次総合計画
「タプコピア」より

この計画では、計画全体の基本的な考え方を示す〝心〟（行動指針）として、「人づくり」・「組織づくり」・「地域づくり」の三つのアクションプログラムを明確にするとともに、二十一世紀をめざす田子町の重要な戦略プロジェクト（重点事業）として、

◎加工産業をおこす。

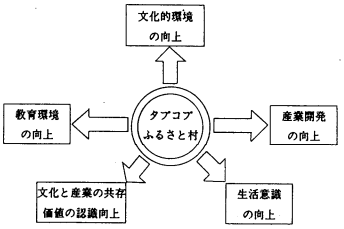
◎タプコプふるさと村をつくる。

の二つのシンボル事業を掲げている。

この中で「タプコプふるさと村」は、アクションプログラムの〝心〟を〝カタチ〟であらわすもののひとつで、田子町の理想郷（将来像）である〝タプコピア〟を実現するための第一歩となるものとして位置付けられている。また〝タプコプ〟とはアイヌ語で「小高い丘（住み易い処）」という意味だが、この語源から「タプコプふるさと村」の基本的な性格を〝田子町の歴史の源を学びながら、タプコプ縄文人の文化を現代に生かし、さらに新しい文化として未来に引き継いでいくことのできる場〟としている。

このため、タプコプふるさと村は、単なる施設整備、エリア開発で完結するものではなく、全町的な活性化（ソフトの向上）をもたらすものであることが求められており、その内容を図示すれば次のようになる。

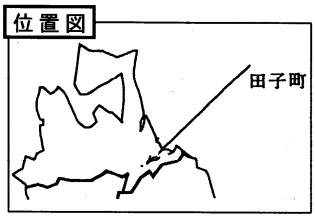
この計画を推し進めるに当たっては、一つの基本路線をもっている。それは、自立の精神ともいうべきものである。例えば産業振興の観点・視点においては他（町外）からの導入（誘致）に依存するのでなく、自前の努力を前提としていくというものである。これは、これからの地域社会で生きていくべきの基本だと私は考えているが、行政（政策）に頼ることからの自立が特に〝農〟の分野や農村社会では必要ではないのだろうか。



さて、ひとつの事例としてタプコプふるさと村の実現のため現在整備された施設の概要とその思想を紹介する。

町を心の「ふるさと村」と位置づけ、それを創る一つの方策として、大黒森（おおくろもり）という標高七二〇㍍の山、ここは、町の中心地から十和田湖へ向かい約十五分の距離に位置する山裾にふるさとの産業・文化を体験できる施設「タプコプ創遊村」が整備された。当初は、このような山の中にこんな施設をつくってもという意見もあったが、観光という側面よりも田子に残っていた貴重な文化的財産をどう保存し、生かしていくかという観点から推し進められ、アクセス上の不便さを我慢してもそのユニークな内容から年間五万人以上の来訪者が訪れその数も年々増えつつある。

位置図



手づくりと昔遊びの感動ゾーン

タプコプ創遊村

時の流れとともに消滅しがちな暮らしの遺産。ここタプコプ創遊村は現存する歴史的なかやぶき屋根の民家を移築保存してあります。そのたたずまいは、まさに遠い昔に確かに存在していた空間。そこには日々の農家の暮らしが見え隠れし、いまはすでに隠居の身となった農具や生活用具たちが、まるで戦士のごとく横たわっています。

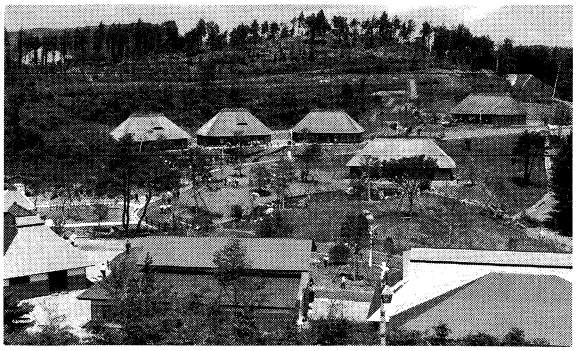
建物の構造に昔の暮らしを想像するもいいし、現在ではなかなか手に入らない材にた

め息をつくもいいでしょう。それぞれの家では昔を偲ぶべく往時の呼吸が体験できるよう企画運営されています。

また四季折々の自然の移ろいを楽しんだり、その季節ならではの手づくりミニ催事も開催され、村人との会話の中で新しい明日の生き方のヒントを見出すことも少なくありません。特に都会人から感動される心休まる空間です。

手打ちそばづくり、手焼きせんべいづくり、陶芸、木工、手前味噌づくりなど。都会の喧騒をわすれ生命の洗濯をするのにぴったりの異次元空間と呼ぶ人もいます。

このタプコプ村の建設は、十数年前から町中の美しい農村風景を形どっていた茅葺の民家が年々減少しつつある中でなんとかそれらを保存していく方法がないものかと思案していたことがきっかけとなっている。当時は、とりあえず改築などに際し所有者の協力・便宜をうけ町が譲り受け保有していたわけであるが、平成元年に自治省のふるさとづくり特別対策事業が適用となり、町の起債（借金）でもってその建設に着手した。その発想は、町の美しい昔の姿を再現・保存し次世代へ伝承することおよびこの地域の産業・文化を生きた形で人々に伝えるために体験・創造活動、自然体験などの観光の場としても併せた機能を持つようにと、ある面では欲張った構想となっている。しかしながら、農村の産業・文化という漠然としたものを生きたカタチで保存・伝承するためには、ヒトがなにかをやらずにはすまされず、結果的には、職業人としての「人づくり」が必要と同時に収入を得るための方策、ここでは、観光という手法から、文化的体験を組み合わせたものである。



▶タプコプ創遊村

農村文化の創造を
モノを都市に、ヒトを農村に

農業振興の観点から、付加価値をつけた加工製品の製造・販売が提唱されて久しいが、私はそれとともに都市と農村の交流、いわゆるモノを都市に、ヒトを農村にという相互交流が必要と考えている。ヒトをどう呼び込むか、この方法は観光という視点のほかいろいろのアイディアがあろうが、農村の生き方としてモノの生産ばかりに重点が置かれ過ぎている気がしてならない。"農"の良さをもっと知ってもらいよき理解者を増やすためには、土に生きる姿を見せるとともに、体験させる必要があると考えている。当町ではいかに「田子のファン」をつくるかに主眼をおいているところである。このような中で農村文化の隠れた良さが伝えられていくのではなかろうか。また、農村社会のさまざまな慣習、これがヨソ者を農村社会に入り難くし、時には閉鎖的な旧習として誤解を受けているところに、若者が離れていくという現象がみられるのではないだろうか。これらを少しづつ変えていくということも、農村文化の伝承とともに新たな農村文化の創造の必要性を感じるところである。農村では文化というと何かと伝統的文化を対象とすることが多いため、とくに流動性が少ない農村社会のそれは「保存」という視点が多いが、良きものは別として新しいものをどんどん取り入れていくことも必要だろう。

タプコプ創遊村、体験の家

さて、タプコプ創遊村では、町に根付き今に生きる産業・郷土文化を見て体験できる場、ふるさとを再認識し創作・体験できる喜びを得る場、自然の中で素朴な人情とふれあい人間性を回復できる場、先人の知恵を学び現在の在り方を考え直す機会の提供などの考え方から、移築茅葺民家五棟および木造工房三棟のほか水車小屋などを集落的に配置し、一つの村を形どった中でいろいろな体験などが年間を通じて常時できるようになっている。この常時というのがここの村の特徴でありその魅力である。すなわち、季節毎の行事をとりいれつつ、お客さまは予約なしでいつでもなにかができるようにとの配慮で、観光的手法とともに良き伝統文化にいつでも触れ合える体勢をとっている。

常時体験できる内容は現在のところ次のようなものであるが、今後はさらに〝農〟の分野でその充実を図ろうとしている。例えば農作物を耕し育てること、牛や羊・鶏などの動物の観光的利用、山菜・茸の採取体験その他茅葺民家での宿泊体験等である。しかしながら、これだけでは現代の人々のニーズには応えられない（収入の面も同様）のが現実である。すなわち、〝農〟の分野のみでは動的魅力に欠けるところもあり、とくに現代っ子、チビッコの要望に応えると同時に冬期の減客期の対策として、来年度を目標にスキー場、キャンプ場、オートランド（ミニバイク・マウンテンバイク・エンデューロ）などの整備も隣接した草地で予定している。

木工の家（ねんりん館）

田子町は、炭の大生産地であったことから炭焼き小屋も併設され、この家では、木の板などの材料を提供し、糸のこや各種工具により木工細工ができる。

陶芸の家（こねくり荘）

町内では、縄文土器も発掘され、昔から焼き物がつくられていたとみられ、ここでは粘土からやきものをつくる作陶と素焼きのものに絵付けをおこなうニコースが用意されている。

鍛冶の家（とんてん館）

農工具の鍛冶屋さんが町内にはたくさんあったが、簡単な鍛冶として、火箸などをつくることができる。

醸造の家（さんねん館）

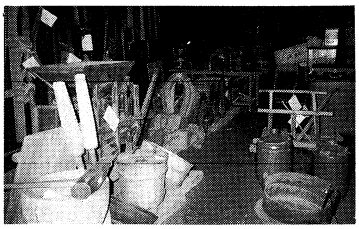
古くから当地域では、どぶろくが作られていたが、酒をつくるのは認められていないので当家では、大豆から作る玉みそ・豆腐・こんにゃく造りが楽しめるほか手作りのにんにく等の加工製品も販売している。

手打ちそばの家（めんくい堂）

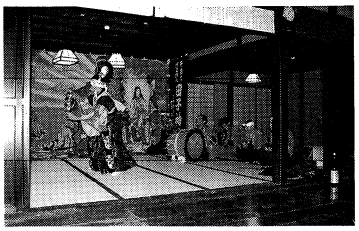
やませ地帯の当地域では、救済食としてそばが古くから栽培されており、当家では田子産のそばを

つかいそば打ちの体験が楽しめる。

その他、当地域の郷土料理及び手打ちそばなどを提供する食堂も営業している。



▲寄贈民具（語り部の家）



▲田子神楽の上演（語り部の家）

▲虫追い風景（細野虫追い保存会）

語り部の家（どんひゃら館）

この家は、南部地方独特の曲がり家（L字型）の茅葺き家で、昔懐かしいおもちゃの販売、当地域に伝わる民話を紙芝居で楽しむことができる。

その他、毎月定期的に県無形文化財の田子神楽の上演や、豊作祈願の虫追いなどの民俗芸能も随時行っている。

注）1)エンデューロはモトクロスより広大なコースで、より長い時間走る耐久レースである。

手焼きせんべいの家（やきもちや）

子供のおやつというべきせんべいを実際に焼くことができる。このせんべいは、「てんぽ」といって餅風のやわらかいせんべいである。

▲手焼きせんべい風景

ニンニク食文化で国際交流

このほか、洋風ペンションの営業などをあわせて、常勤の二十五人の社員が在籍する「財団法人タプコピア」がこれらのタプコプ創遊村を運営しているが、この財団法人も、自前の努力でどれだけやれるかとの発想で設立された。すなわち、町が寄付金を拠出し、社員も町出身のUターン者や田子で働きたいという近隣都市の出身者（これらはほとんどが無経験者でありその〝やる気〟で採用）を募集し自前で養成研修をおこなった。観光的サービスという面ではまだまだの感もあるが、それも洗練されすぎない、良き人情を発揮できるという強みもある。

このほか、当町では同様の手法によりにんにくの食文化などの情報・文献の収集とともに世界一のにんにくの産地である米国ギルロイ市2)および欧州の一大産地イタリア・モンテチェリ市3)との姉妹提携による国際交流を進めるための組織として、「財団法人にんにく国際交流協会」も今年度設立され、その活動を活発に行っているところである。さらには、地域情報、農業市場情報、地域気象情報及び通常放送を有線放送（CATV）化しそれを運営する「財団法人ニンニクネットワーク」の設立も準備しているところであり、開発計画の〝心〟である人づくり、組織づくり、地域づくりを着々と推進しつつある。このような中で旧来の伝統的文化と現代の文化が融合し、田子町独自の新しい農村文化が生まれつつある。小規模な町ながら自立と地道な取り組みにその方向を見いだそうとしているところである。これらがまさに手づくりの町づくりに通じるものであると念ずるものである。

注）2)ギルロイ市は加州に位置する。
3)モンテチェリは、ミラノ近くにある。

合唱をとおした文化活動

▲北海道せゝらぎ合唱団　九州南阿蘇公演（平成４年11月20日、於白水村立白水中学校体育館）

せゝらぎ合唱団　主宰指揮者　**高　橋　亮　仁**

合唱団設立の経過

せゝらぎ合唱団は創立三十五周年を迎え、この間に三百八十回の演奏活動を行ない、合唱団に参加した延団員数は五百名に達しました。

演奏した地域は十勝管内一市十五カ町村はじめ、東京、札幌、釧路市公演、道東、道南、道央。道外では静岡、福井、和歌山県と九州南阿蘇公演。また東京新宿文化会館に於いて行われた第一回国民文化祭には北海道代表として初出場し、辺地巡回演奏、中学、高校の芸術鑑賞など感動の数々を積み重ねてきました。

合唱団の三十五年の経過を辿ると、十年をひと区切りにして三期に分かれています。

創立から十年までは地域社会の認識も少なく、ただ好きだから合唱の練習に励み、互いの情熱に支えられながら若き日の感激に胸躍らせて乗り越えた苦難の土台作り。

地域に根ざした生活と共に育つ合唱団をめざし、自分たち合唱団の顔に責任をもって不可能を可能にして活動した二十年まで。

以後地域の文化運動の底辺を支えようと、幾多の試練を厚い友情で乗り越え辿りついた三十周年、更にたゆまず続いている三十五年を振り返り、設立からの経過を記してみたいと思います。

設立の頃

戦後、生きるために精一杯だった苦しい生活から漸く立ち直り、人々が精神文化を求めはじめた頃でした。

当時、清水町は様々な趣味のサークル活動がはじまり、三十三年に道東一といわれる画期的な公民館が建ち、文化活動の拠点になっていました。しかし音楽への関心は少なく、「誰でも気楽に歌う合唱を」という呼びかけに、三人の清水高校卒業生の女性が参加して、昭和三十四年一月七日第一回の練習がはじまりました。

清水町は道央と道東を結ぶ日勝峠の麓に広がる広大な十勝平野の西部に位置し、酪農や豆類、馬鈴薯などの寒地作物を中心とした人口一万人たらずの町で、私は清水高校の音楽教師として三十三年十一月赴任したばかりの二十七歳でした。

当初は「合唱ってなんだ、若い男女が集って何をしているのかわかったものではない」と批判めいた評価がメンバーの耳に時々入っていたようです。

▲初めての演奏会、昭和34年7月5日（清水町公民館）

この音楽文化の乏しい地方には「地域に結びついた生活と共に育つ合唱団でなければ」と心に定め練習を重ねていきましたが、次第に友が友を呼び、自宅の一部屋がたちまち狭くなり、次の部屋を開放しての練習となりました。

まだ車の少ない時代、近くの者は別として数㌔離れた所からは自転車やバイク、また帰りはタクシー等で大変な努力でしたが、歌うことの楽しさとハーモニーの魅力を通して、仲間と心を合わせる連帯感が合唱への情熱となり、すべての苦難を克服していきました。

レパートリーが少しずつ多くなり、自分たちが情熱を傾けている合唱を認識してもらおうと、その年の七月はじめての演奏会を行いました。二百人を超える聴衆を前に感激の演奏会を終え、高まる合唱の喜びと共に名前をつけることになりました。

それぞれ各自が名前を出し合い、小さな合唱団だから〝せゝらぎ合唱団〟と多数決で定まりましたが、この名前には「山あいの小さな流れが爽やかな響きを奏でながら、次第に流れ寄る水を集め地域を潤おし、やがて大きな流れとなるように」というメンバーの祈りと願いがこめられたのです。

この清水町公民館でのはじめての演奏会に一番苦労したのがピアノでした。道東一を誇る公民館でしたがピアノが無く小学校のグランドピアノを借り「絶対傷をつけないでくれ」と言われたので、汗だくで持ち上げ運んだことです。それ以来毎年ピアノ購入寄金としてチケットを売り、純益を町に寄付し、三十七年に待望のピアノが入った時の喜びは今でも忘れられない一つになっています。

それ以来、自分達の演奏会だけでなく、プロの演奏も地域の人々に聴いていただき関心を高めようと、ピアノ・ヴァイオリンなど東京から一流の演奏家の主催公演もはじまりました。

このような努力の成果をいよいよ十勝の中心地で試す時が来ました。帯広市民合唱祭への初参加です。市内の合唱団に混って十勝管内から初めての参加でしたが、思いがけない好評を受けた喜びと、それにも増して音響の良いホールで歌う喜びと感動を知ったのです。

十周年記念帯広公演に向かって

〝音響の良い市民会館のホールで十分間の制限時間に縛られず思い切り歌いたい〟という夢が次第に膨らみ遂に十周年記念公演を帯広市民会館で、と決定しましたがその日から苦難の日々がメンバーにのしかゝってきました。

清水町から三十三㌔離れた帯広公演は、メンバーで誰も車を持っていない時代、土・日の休みを利用してのポスター貼りやチラシ配り、券売りといった難問題が立ちはだかりました。

名もない合唱団のこと千五百の座席をいかにして埋めるかが最大の苦労で、戸別訪問の券売りでは戸をピシャリと押売りまがいに閉められたり、犬に追いかけられたり、数々の涙ぐましい努力で迎えた本番でしたが、遂にホールを満席にして大成功をおさめました。

この公演は新聞に報道され、せゝらぎ合唱団の存在を町内外にみとめられるきっかけとなりました。そして寸暇を惜しみ寝食を忘れて努力した団員の心に〝せゝらぎ合唱団は自分たちの人生の大いなる記念塔であり心の記念碑〟として刻み込まれました。

此の時フランスから帰って東京で活躍していた岩本義哉さん（清水町公民館にピアノが入った時主催したピアニスト）が友情出演に駆けつけ「この合唱団は東京でも引けを取らず通用するからぜひ東京公演を」と高い評価をして帰りました。この言葉が切掛けとなり、果しない東京公演への夢が広がっていきました。

東京公演の意義

「地方にあって地方にしかできないもの、他には育たない独自のものを東京で聴いてもらいたい。大志を抱いて上京し東京で頑張っている人達にふるさとの香りを合唱で伝えたい。そして国の内外の一流の演奏家が演奏している東京文化会館のステージで歌いたい」という途方もない東京公演の意義と夢を練習が終わった後、夜が更けるのも忘れ語り合う日が続きました。

この結論のあとお金の無い合唱団の第一の手段として旅費の積み立てを行ない、それと平行して心も一緒に四年間積み立てていきました。それは今の海外旅行より大変な虹の橋の階段を、一歩一歩上がって行くような思いでしたが週二回、三回と続く練習に一人の落伍者もなく、一昼夜の汽車の旅でいよいよ東京へと出発しました。

昭和四十七年十月十日の東京公演は総経費百九十七万円を費した大事業でした。郷土の人々の心温まる応援、東京在住の清水高校卒業生の協力、そして多くの方々の真心が思いもよらない大成功へと導き、満席の聴衆の心をとらえて世界一流の演奏家にしか来ないと聞いていた拍手（会場の拍手がダッダッと一つに揃う）がくることは誰も予想していませんでした。この大成功の陰に忘れられないのは全日本合唱連盟育ての親として、また日本合唱界の大御所とも言われた作曲家故清水脩先生との出合いです。

清水脩氏との出合い

せゝらぎ合唱団にとって重要なレパートリーの中に清水脩作曲、合唱組曲「山に祈る」があります。この曲を東京で演奏するので「プログラムに一言頂きたい」とお願いしたのがきっかけです。先生は後で言われましたが「北海道の地図にも載っていない田舎の合唱団の東京公演など眉つばものだ」と思ったそうです。しかし依頼文と共に送られた十周年公演のプログラムをみて、これは本物かもしれないとそのけなげさに感動し、清水町に二度も来られ、心からなる指導と激励を受けました。

当日は客席で聴き終えると、思いがけずステージに上がられ「誠に素晴らしいコンサートでした。私は皆さんに音楽の原点を教えられた。地方でのあなた達の活動は中央に地殻変動を起こした大きな文化運動です」と高く評価されました。この言葉は私の心にしっかりと刻み込まれ、余りの感動でうなだれていたメンバーの顔には一様に汗と涙が光っていました。

昭和四十九年には北海道の中心

◀合唱会の大御所清水修氏の絶讃を受け感激の涙、頬をぬらす念願の東京公演（昭和四十七年十月十日、東京文化会館）

地札幌市民会館を立ち見の満席にし、ステージ演奏活動百回記念公演を成功させ、次第に活動が認められ辺地巡回演奏活動が始まりました。

辺地巡回演奏と芸術鑑賞

巡回演奏は清水町や十勝教育局の計らいで、十勝管内十九ケ町村の小学校の児童と校下の農村の人達のための演奏会です。ある時は十七人の児童と二十一名の父母の前で五十名のメンバーが汗だくで演奏し、児童と一緒に歌った校歌の感動。七十五年の歴史を閉じる十勝三股小中学校の閉校式で、六人の生徒と共に涙で歌った〝ふるさと〟の歌の思い出、また各学校から届く「生まれて初めてナマのすばらしい合唱を聴きとても楽しかった。きっとまた来て下さい」のいじらしい感想文。

高校の芸術鑑賞では三十度の猛暑の中、〝合唱団の皆さんが汗も拭わず歌ってくれる〟と詰襟のボタンもはずさず熱心に聴き入る虻田高校生。行儀が悪くて静かに聴かないのでは、と心配していた校長、先生方の言葉がうそのように、瞳を輝かせて聴いてくれた松前町の大島中学生の顔など一〇〇校近

▲この顔、この瞳に励まされた

▼辺地５校合同の小学校児童のため汗だくの演奏

▲全国の注目をあびた清水町の第九、心をひとつに感動がうず巻く。
（昭和55年12月７日、清水町文化センター）

い演奏のすべては、団員にとって何にも勝る励ましの心の糧となりました。

この数々の演奏と実践をとおして確信するようになったのは「思うことは実現する」という言葉です。そして遂にその思いが叶い、全国でも前例のない酪農の町のベートーベンの「第九交響曲」の実現となったのですが、この「第九」は東京公演以来の夢でした。

町民参加の「第九」

昭和五十五年十二月七日、人口一万二千人の清水町に、都市でなければ認可が下りないという文化会館が落成し、こけら落としにふさわしいものとして町民参加の「第九」の提案と実現となりましたが、「第九」は日曜大工と思われていた当時、文化会館落成を町民こぞって喜び合おうと殆ど合唱経験のない人が参加し、年齢は中学生から七十二歳まで、職業も自営業、酪農家の主婦、農村青年、公務員、サラリーマン、学生、教員と様々でした。中には「町で何か大きな事をするので大勢の人が必要らしい。私たちで役に立つなら」と六十歳近い婦人会数名の参加もあり、八月一日町民の第九合唱団の結団式までやっと漕ぎつけました。

普通、音大の声楽科か経験豊かな合唱団で半年以上の取り組みとされていた「第九」。それが十二月の本番まで僅か四カ月の期間しかなく、せゝらぎ合唱団以外は楽譜を見るのもはじめての人々と共に、文字通り涙ぐましい努力が続いて行きましたが、三カ月経った頃から意外な報告が出てきました。

牛舎にテープを持ち込み毎日練習していたら搾乳量が少しずつ多くなったと気付く人。九官鳥が突然「ダイネ・ツアーバー」と歌い出したり、農業を営む人が親子で参加して家庭が明るくなったなど様々なエピソードを織りまぜ、団員とそれを理解してくれた家庭の協力に支えられて迎えた本番でした。

前例のない「第九」として全国の注目を集めた札響と二百四人の合唱はすべての人々を感動させ「ドイツ語の意味もわからず、オーケストラの演奏を聴いたのも初めてなのに涙が出て仕方がなかった」と言う人達や指揮の大場陽一郎氏は「こんな振りがいのある第九は初めてです。ソリストが涙して歌っていたがプロは素人が努力したくらいでは泣かないものだが、この合唱団にはそれを超越する何かがあった」と言い、鳴り止まない拍手は合唱団員が一人残らずステージを下りるまで続き誠に感動的な「第九」となりました。

地域住民の反応

合唱は一人では成り立たず複数の人声を合わせるため、設立当初は耳慣れない音楽であり、なじまれない歌と言うイメージだったようです。それだけに華道、茶道といった稽古事より価値のないものとして「合唱など習っていたら婚期が遅れるといわれた」と嘆く女性メンバーもいて、現在では信じられないことでした。

行政からも社会、マスコミからも取り上げられることもなかった時代のメンバーの努力は尊く、苦節十年により漸く地域の人々に認められることが出来たのです。この十年の積み重ねがなかったら現在のせゝらぎ合唱団は存在しなかったと思います。

それと共に忘れることができないのは報道の力です。十周年記念公演、東京公演の報道により地域の人々の関心が高まり、町の有志の方々の支援と後援も寄せられ、地域の内外に高く評価されてきました。

それ以来始められた管内の演奏で次々に合唱団が誕生、全日本合唱連盟の加盟団体は主に市の団体ですが、町村の加盟が多い帯広合唱連盟は稀な存在となっています。

昭和五十一年頃には北海道青年文化の集いの大会にメンバーの農村青年も加わり、二度の北海道代表で全国入賞もしたり「第九」には町内各層の職業の人々が参加、この様子がNHK、HBCテレビ、ラジオで全国に放送され、各地に住む清水町ゆかりの人たちは「この時ふるさとをしっかり意識し、清水町を郷土に持ったことをこの

時ほど誇りに思ったことはなかった」という便りが届き、感動が更に高まりました。

これまでの活動に清水町文化賞はじめ数々の賞を受けましたが、昭和五十六年十一月北海道文化奨励賞を受賞。また国際ミュンヘンオペラ歌手のガラコンサートや、東京二期会のミュージカル「マイ・フェア・レディ」「サウンド・オブ・ミュージック」など芸術性の優れたコンサートを主催し、クラシックは無理と言われながら常に満席で、清水はレベルが高いと羨ましがられるのも地域住民の反応の現れと受けとめています。

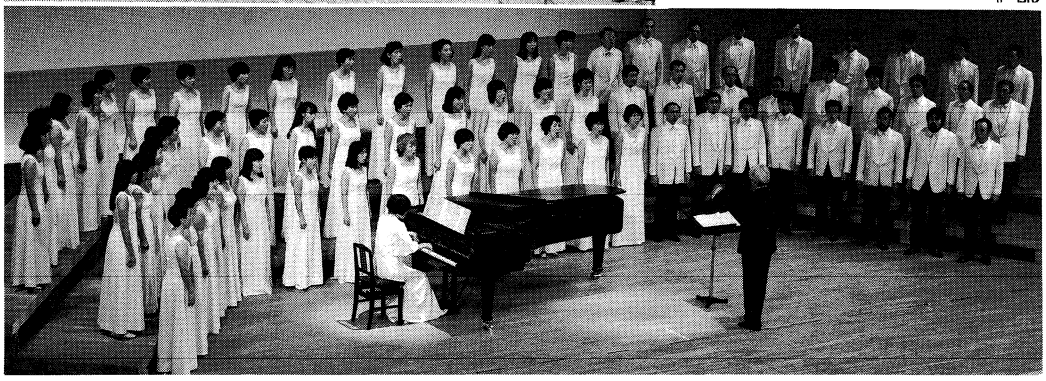
おわりに

このように三十五年の活動ができましたのも、町長はじめ町関係各位の理解と援助、町内外の各企業の協賛と協力、自主的後援会の応援、各報道関係の支援、また清水高校勤務三十年を続けることが出来た道教委の理解。更に良い職場、良き同僚、よき卒業生達と素晴らしいメンバーの情熱と友情。多くの聴衆などすべての条件の結集によって「小さな町で信じられない活動をしている合唱団」として、図らずも不思議がられる存在となってしまいました。

また行政は公民館ピアノ購入の時のように、自主的活動を目指す者達が真剣に求めている必要なものに対する熱意には支援の手をさしのべてくれます。良い音響を求め帯広、東京、札幌公演などの意欲的な活動が評価を受け、文化センターが設立され、「第九」の実現となりました。三十五周年記念静岡公演には思いがけない援助をいただき、今まで手弁当活動を続けたメンバーの努力が認められたのを喜び合いました。

今後の活動は全国的ブームの火付役を果たした町民参加の「第九」を、「第九」の初演地であるウイーンで演奏し、参加した人たちの熱意を届けたいことと、認めて下さった多くの方々に報いるため初心を忘れず、声のかかった所への手弁当演奏活動と、更に地域の文化向上をめざし子供からお年寄りまでの生涯合唱。忙しい農作業の方々が年に何回か仕事を忘れ、オペラ、ミュージカルその他のコンサートに足を運ぶようにしたいなど際限のない夢の実現を念願しています。

▼「ＮＨＫ音楽の広場」出演、大谷牧場牛舎前。
北海道―東京―九州を電波でつないで歌った第九。



▼コーラスと吹奏楽による音楽の祭典。
第一回国民文化祭イン東京。
（昭和六十一年十一月二十六日、新宿文化センター）

わが町の記念館

鹿追町「神田日勝」記念館はこうして生まれた

鹿追町教育委員会 神田日勝記念館
主事 菅 訓章

平成五年六月十七日、鹿追町立神田日勝記念館の開館式が挙行されました。帯広市から北西へ約三十キロ、十勝平野と東大雪山麓の間に位置する純農村の市街地の入口の国道沿いの広大な芝生の前庭の奥に、記念館はアースグレー調の煉瓦の外壁に包まれ、日高山脈をイメージした外観を誇えさせています。神田日勝氏没後二十三年、建設運動が展開されて十五年以上が経過していました。

神田日勝氏は昭和十二年東京練馬に生まれ、八歳の時戦時疎開で鹿追町へ入植しました。中学卒業後、開拓営農に従事するかたわら油彩画を制作、昭和三十一年帯広市の「平原社展」に出品した『痩馬』で奨励賞を受賞以来、十五年間にわたり制作活動を続けました。三十五年には『家』が全道美術協会展（全道展）初入選、以来同展に出品を続け、三十六年には『ゴミ箱』で知事賞、三十八年『板・足・頭』で会友、四十一年には『静物』で会員に推挙されました。また三十八年『一人』を第三十二回独立展に出品初入選し、新人室に陳列されて以来、同展にも出品を続け、後に会友となりました。初期の作品は馬に始まり、家、ドラム缶、廃品など、身辺の事物を題材に取り、モノクローム調の色調と、対象の形態・質感の特徴を克明に強調した描写を特色とした制作を行いましたが、四十一年以降『画室』の連作に見られるような色彩のひしめく作品が描かれ、さらにアンフォルメル的表現の『人と牛』『人間』の連作へと展開されました。晩年には、再び写実的手法の作品が制作され、没年の『室内風景』、さらにリアリズムの世界への回帰を思わせる『馬』（絶筆）をもって、腎盂炎による敗血症のため、三十二歳八カ月の短い生涯を終えました。日勝は農民画家という言葉を嫌い、「画家である、農民である」と明確に区分して自己を語った人でした。死のひと月前に全道展帯広巡回展の目録にかかれた「結局、どういう作品が生まれるかは、どういう生き方をするかにかかっている。どう生きるか、の指針を描くことを通して模索したい。どう生きるか、と、どう描くかの終りのない思考のいたちごっこが私の生活の骨組みなのだ」という言葉がリアリスト神田日勝を的確に表現している言葉として残されています。

神田日勝氏の画業の評価がなされたのは、実は北海道や地元帯広ではなく、東京からでした。四十五年、没後に旧東京都美術館で開

催された第三十八回独立展に出品された『室内風景』が美術評論家宗左近氏の目に止まったことが契機でした。その感動は四十六年に「日本の子守歌１―北辺の農民画家神田日勝」として『時代』誌に発表され、また宗氏と親交のあった岡田武昌氏によって東京柳屋画廊で同年遺作展が開催されました。

翌四十七年地元鹿追でも、鹿追町文化連盟が中心となり、鹿追町社会福祉会館に百一点の作品を集めて「神田日勝遺作展」が開催されました。新進気鋭の社会教育係長吉田弘志氏の熱意と行動が、ややもすると地元ではなかなか評価されがたい雰囲気を克服して、日勝氏の画業にスポットをあてた形になりました。この遺作展の成功が、日勝氏の名を全町に広めることとなり、後の記念館建設運動の萌芽につながっていきました。

一方、四十八年には『室内風景』『死馬』『人と牛Ｄ』の三点が北海道立近代美術館に収蔵され、以後遺作後見人米山将治氏の献身的な画業の整理と主張とあいまって、近代美術館の学芸活動が、日勝氏の声価を北海道を代表する画家の一人として結晶させていきました。五十三年には「神田日勝の世界展」が札幌の北海道立近代美術館を皮切りに、東京の小田急デパートグランドギャラリー、更に帯広市民会館と巡回されました。また北海道新聞社からは『神田日勝画集』が公刊され、日勝氏の代表的作品群が一般の目に触れることとなりました。

四十九年鹿追町に新しい文化運動を目指して青年文化集団「らんぷ」が結成されました。当初町民文芸誌創刊の先駆として、同人誌「ほうし」（胞子の意）を発行、その第三号と同時に特集号を計画、かねてより神田日勝氏に傾倒していた代表の三井福源氏の提唱により「神田日勝」がテーマとして取り上げられることになりました。この本は、日勝氏の兄姉妹・親戚、郷土笹川の友人・知人、更に帯広の画家等に直接取材した評伝を骨子に、ゆかりの人々の投稿、この本が編集される前に公開された各評論をほとんど集録し、五十二年五月に刊行されました。以後「らんぷ」は鹿追における神田日勝氏にかかわる事業に積極的関係を持つようになっていきました。

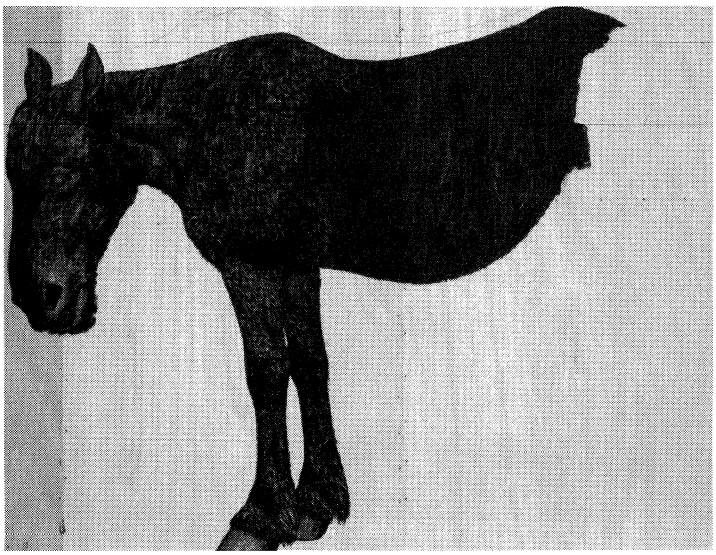
◀ 鹿追町全景

ほぼ同時期に起こった画集の刊行、巡回展の開催、そして地元における「らんぷ」の活動が、結果的には相乗効果の役割を果たしました。「らんぷ」は帯広巡回展の収益の一部を、鹿追における神田日勝に関わる活動のためにという趣旨で預かることになり（もう一部は美術館建設促進という意味で帯広市に寄付）、「神田日勝記念会」を別称することになりました。この基金は後に建設運動を推進する啓蒙活動の一環としての作品絵はがきの印刷資金として活用されました。

「らんぷ」は『神田日勝』の編集後記に「私達は日勝の作品をできる限り多く鹿追に残しておきたい。日勝の偉業を鹿追町民の心の共有財産として永く保存活用していくために、収蔵庫ひいては美術館なり文化センターの建設が急務と思う」と記しました。しかし、作品に対する夫人の遺品としての愛着、町民の画業に対する理解等の様々な要因から、記念館建設はやっと萌芽期を迎えたに過ぎませんでした。

五十六年、鹿追町考古学研究会創立五周年の記念講演で来町した藤本英夫氏との出会いがこの運動に転機をもたらしました。藤本氏の提唱する「ミニ博物館論」は、「らんぷ」の夢と符合するものでした。藤本氏の文章の中には、

「その地域に密着した人の、例えば絵描きであればその人だけの作品を展示する小さい入れ物（美術館）がほしい。立派なものでなくていい。むしろ、どこかハングリーがあっていい。ハングリーなところから夢が生まれる。（略）個性的な施設には、少しくらい不便でもファンは足を運ぶものだ。私は個性的で、しかもあまり気ばらない施設を造ろうとすれば、もっともっと造れそうな気がするのだが、一」（「私の『ミニ博物館論』」）として、伊藤整・亀井勝一郎等ともに、神田日勝・木田金次郎の名が上げられていました。



▲　馬　（絶筆）

「らんぷ」の活動はそこから本格化しました。「有島記念館」等の視察、帯広市の建設業者の協力を得て記念館設計図（話し合いの素材のための試案）の作成。帯広百年記念館開館一周年記念企画「神田日勝素描と資料展」に併せる形での絵はがきの作成。そして翌年には「らんぷ」の記念館に対する見解に高橋揆一郎・小桧山博・藤本英夫氏等のエッセーを収載した「ほうし」第八号を刊行しました。

しかしこうした運動は僅か四人の若者集団の枠を大きく越えたものでなければならず、五十九年二月、鹿追町文化連盟三役に日勝氏の友人を加え、「らんぷ」が事務局を務める形で「神田日勝記念館建設準備会」が設立されました。準備会は倉田公裕道立近代美術館長を迎えての学習会の開催、「準備会ニュース」の発行を行いました。さらにこの動きは、同年春の鹿追町文化連盟の定期総会において、建設運動推進を組織として承認するということにつながりました。文化連盟は日勝氏の画業に対する地元の理解を得るための学習活動に意を用い、以後武田厚道立近代美術館学芸部長・鳥居省三氏等を講師に迎え、日勝の画業と記念館の意義を広く町民に訴えました。

五十九年十一月、準備会構成員に文化連盟理事を加えた形で「神田日勝記念館建設実行委員会」の設立総会が開催されました。実行委員会には企画部、情宣部が設置され、企画部においては立地・施設像・職員・運営体制・入館者論が討議され、その結果は情宣部の「記念館フラッシュ」というパンフレットの形で全町に配布されました。そこでうちだされた内容は、日勝氏は鹿追の文化のシンボルであること、施設はだれでもが気軽に足を運べる市街地に建設して文化センターと連動し機能融合できること、また作品がベニヤ板に描かれ相当の年月を経過していることから温湿度に留意した収蔵庫を持つこと、単なる絵の展示場でなく催し物ができる場を持つこと、専門の学芸員を配置し設計時から建設作業に従事させること、運営には審議会を設置し委員には思い切った人選をすること、社会教育施設であることをふまえながら観光施設としての役割を持つこと、等ですが、実際に完成した記念館をみるとき、この提言が多く実現

されていることに先駆的意義を感じます。

しかし運動はなかなか進展しませんでした。日勝氏の絵の価値判断に個人の絵に対する好悪の感情が入り混じった議論が交わされ、また日勝氏の個人美術館では他の町内の画家はどうなるのか、むしろ鹿追町立美術館とするべきではないか、はたして観光にプラスになるのか、それなら公民館の一室で充分ではないのか、また記念館を建てるのだから遺族は作品を全点町に寄贈すべきだ、等々様々な議論が噴出しました。実行委員会では、日勝氏の画業については氏に関する膨大な論著が公刊されており、また小中学校の教科書にもその作品が掲載され、道立近代美術館では『室内風景』を館の代表作品として取り扱っていることを判断材料とし、遺作の寄贈については鹿追の文化のシンボルとして個人の財産を残してもらうのであり最初から全点寄贈を遺族に要求するのは筋違いであると考えていました。また記念館は道立近代美術館と連動していかなければならないという観点から、『室内風景』を始めとする作品に感動した人が鹿追を訪れ、そこで生きざまを示す資料に接するということを重視し、美術館ではなく記念館という名称を一貫して主張しました。通過観光型の典型の鹿追で記念館が観光の拠点たり得るかという点には、当時の道観光局長橋本礼三氏が「そこに住んで良い町こそ人が訪れて良い町である」と応援してくれました。

六十一年町議会は記念館建設促進に陳情を採択、公民館施設との機能連携を考慮して建設されることが望ましいという方向で審議がなされました。

六十二年運動は大きな転機を迎えました。岡野友行新町長は選挙公約に記念館建設推進を掲げ、当選後は『飯場の風景』を購入、建設に前向きな姿勢を示しました。この機運を受けて、実行委員会は六十三年募金活動を展開『画室C』を購入、町に寄贈し、建設促進を訴えました。岡野町政の下、記念館建設は徐々に町民に浸透していきました。しかし、これは記念館建設が全町的に共通理解を得たというより、理事者の熱意が町をその方向に導いたといっても過言ではありません。

町では、年輪の村構想の施設整備の一環として記念館を組み込み、絵画購入にふるさと創生資金を活用、建設構想に着手しました。平成二年五月「神田日勝記念館建設計画検討委員会」を設置しましたが、その委員として町内有識者の外、帯広の美術関係者や道立近代美術館の学芸担当を委嘱したことは、鹿追に取って異例であり、画期的なことでした。この委員会の提言で、翌年開設準備室が設けられ専任の準備室長と学芸員の配置が実現しました。さらに、開館を半年後に控えた四年十月には、円滑な運営を図るため運営協議会が発足しました。

一方、建設運動に携わった住民の間から記念館を支援する「記念館友の会」構想が浮上、開館を待たずに設立総会が開催されました。これは、館の付属組織ではなく、独自の事業計画をもって記念館と密接に協力して活動を行うことと

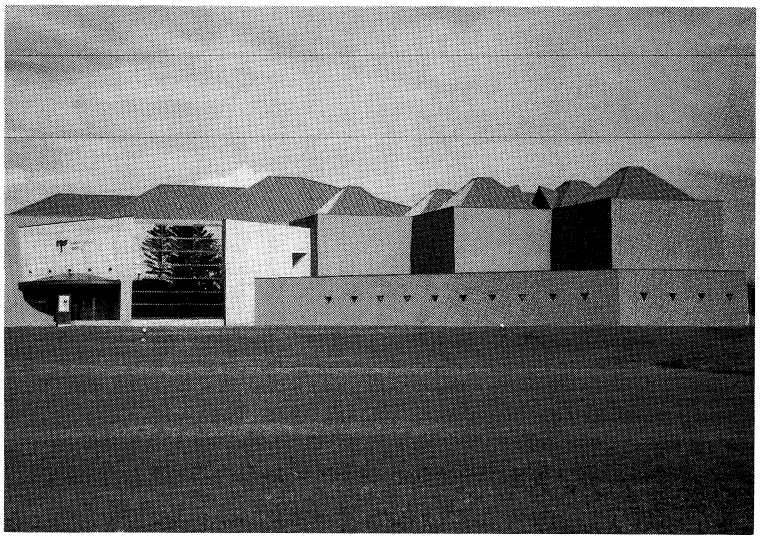
し、開館以来地元作家展、氏の命日に近い日曜日に画業を顕彰する「馬耕忌」の開催、移動美術館など積極的に事業を展開しています。イベントではなく、継続的に、しかも建設運動終了後もこうして記念館にかかわる住民運動のあり方は、他に範となるものと思われます。

四年、道立近代美術館と下関美術館との共同企画である「日本のリアリズム」展において、神田日勝氏が、中谷泰・曹良奎と並ぶ日本の新具象の代表的画家として定位されたことは、記念館開館を目前にして極めてタイムリーなできごとでした。

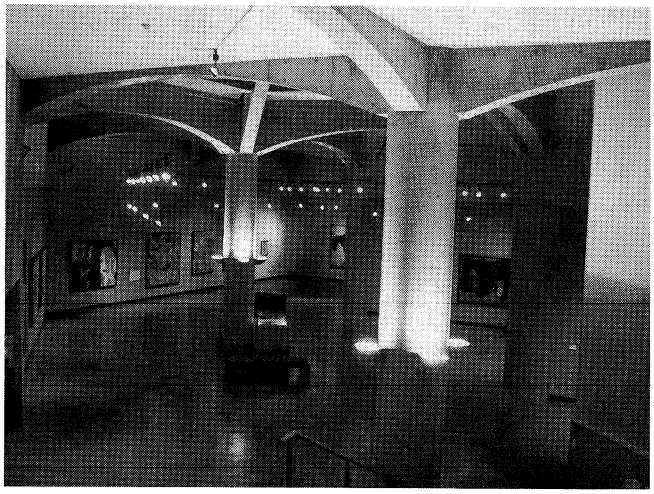
こうして完成した記念館は、面積約千二百平方メートル、ベニアに描かれた初期の『自画像』から最晩年の『馬』（絶筆）にいたる十五点の代表作群の並ぶ第一展示室と記念館ならではの資料・素描群が並ぶ二階第二展示室を中心として、収蔵庫・研究室・会議室等が配置され、特にドーム調の展示室は、その空間自体がひとつの建築芸術とでもいうべきものとなっていま

す。またロビーに置かれた「レーザーディスクから放映される『生命の痕跡』は来館者をして涙させ、この種の施設の映像としては驚異的視聴となっています。懸念された作品数の少なさはまったく問題にされず、開館前に議論された目玉としての『室内風景』の借用問題も、『馬』（絶筆）を始めとする代表作群の圧倒的迫力の前には全くの懸念でした。

入館者は予想をはるかに上回り、開館一月に一万人を達成、半年にして六万人を数えました。さらに近接する坂本直行記念館・道立近代美術館と連動し、十勝美術館ロードを形成し、多くの美術ファンをひきつけるまでに到っています。



▲「神田日勝」記念館全景



◀記念館室内

短期的に見れば町興しがはからずも実現した形になりました。

この記念館の完成と盛況は、町民にとって日勝氏の絵の持つ魅力をはからずも多くの町外の人々の影響によって再認識させることにつながり、次代を担う青少年には大きな文化のシンボルを与えられたことになります。その影響は、現在よりむしろ後代に素晴らしい遺産となることでしょう。町興しの観点から見ればひとつの特色ある拠点を得たことにもなります。

ただ、神田日勝は今や決して鹿追町の神田日勝ではありません。この施設の意義は、北海道の、いや日本の代表的画家として日本美術史に、その画業を定位していくことにあります。来館者の対応に追われることで満足することなく、職員体制の充実、調査研究活動の推進といった地道な活動を踏まえた本物の施設を造りあげていかねばなりません。住民の理解は、入館統計からも決して満足できるものではありません。啓蒙普及活動も継続的に行われなければなりません。

記念館の完成は、実はこれからの山積する課題への第一歩だと思われます。